

宇佐神宮における門前町の地域生態と観光動態

別府大学短期大学部講師 小堀 貴亮

I. はじめに

(1) 研究の目的

本研究は、全国八幡宮の総本山として君臨し、名実ともに日本における社寺参詣観光地の代表格である大分県宇佐神宮の門前町を対象に、その地域生態（地域的環境、即ち関係位置、自然環境および社会環境と、その集落構成要素における様々な側面の動向や住民意識などの関連性）および観光動態（土産品店・宿泊業をはじめとする観光関連施設および観光客の動態）を明らかにすることを目的とする。また、その際、近年日本各地の門前町や城下町などで進められている町並み景観整備に関する当該地区の住民意識についても把握し、現在、宇佐アーバンデザイン会議の一環として議論されている、宇佐神宮門前町町並み景観整備の方向性や観光振興の課題についても試論したい。

門前町は、神社・仏閣の門前に発達した町で、参詣者を対象とした土産品店・飲食店・旅館・ホテル・娯楽施設や、その他宿坊・御師の家などが門前道路沿いに立ち並んでいるような集落のことをいう¹⁾。門前町の規模は様々であり、わずか一軒の飲食店兼土産品店兼旅館によって成立しているものもあれば、成田・琴平・長野などのような大規模門前集落といえるものまで存在する。特に明確な規定はないが、宇佐神宮の門前町自体は比較的小規模な部類に属されよう。なお、神社は鳥居なので鳥居前町であるなどとして区別することもあるが、一般的に上級概念としては門前町でまとめても差し支えない²⁾。

このような門前町に関する研究史を辿っていくと、比較的古い時代から様々なアプローチによる研究が蓄積されてきたが、とりわけ歴史地理学的研究がその主流として位置づけられる。具体的には、田中³⁾による千葉県成田町（現・成田市）の研究、浅香⁴⁾による木曾御岳・富士山北口・大山などの一連の研究、岩鼻⁵⁾による戸御神社の研究、佐々木⁶⁾による茨城県筑波山門前町の研究などがあげられる。これらの先行研究は、いずれも門前町の形成過程やその構造、立地生態などについて明らかにしたものであるが、観光動態と

¹⁾ 佐々木博（1983）：筑波山門前町の立地生態。筑波大学地球科学系人文地理学研究Ⅶ、185頁。

²⁾ 前掲1)、185頁。

³⁾ 田中啓爾（1933）：門前町（信仰集落）としての成田町。『地理学論文集』古今書院、449～515頁。

⁴⁾ 浅香幸雄（1959）：信仰登山集落の形成（第1報）—木曾御嶽の場合—。東京教育大学地理学研究報告Ⅲ、183～243頁。

浅香幸雄（1963）：富士北口の上吉田・河口の御師町の形態とその構造—信仰登山集落の形成 第2報—。東京教育大学地理学研究報告Ⅶ、55～82頁。

浅香幸雄（1967）：大山信仰登山集落形成の基盤。東京教育大学地理学研究報告ⅩⅠ、179～196頁。

⁵⁾ 岩鼻通明（1981）：観光化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌。人文地理33（5）、74～88頁。

⁶⁾ 前掲1)、185～208頁。

いう側面の考察はあまり行われていない。本研究対象地域である宇佐神宮は、全国八幡宮の総本山という名のもと、年間約250万人もの参拝客が訪れ、その集客圏は全国区である。にもかかわらず、年間を通じてみると、初詣の1月以外の月は非常に少なく、閑散としている。そのため、本来このような大きな社寺の周辺には必ずといってよいほど形成されている門前町集落が、宇佐神宮においては非常に小規模である。しかも、土産品店などの店舗が時期によって閉めているところが多く、恒常的な観光拠点として機能していないのが現状である。このことは、宇佐神宮の認知度が全国的には低くなってしまっている要因でもあり、今後、周辺地域も含めた宇佐神宮門前町の景観整備および観光振興の必要性があると考える。このような観点から、当該地区の観光動態については重点的に調査を行う意義があると考えたのである。

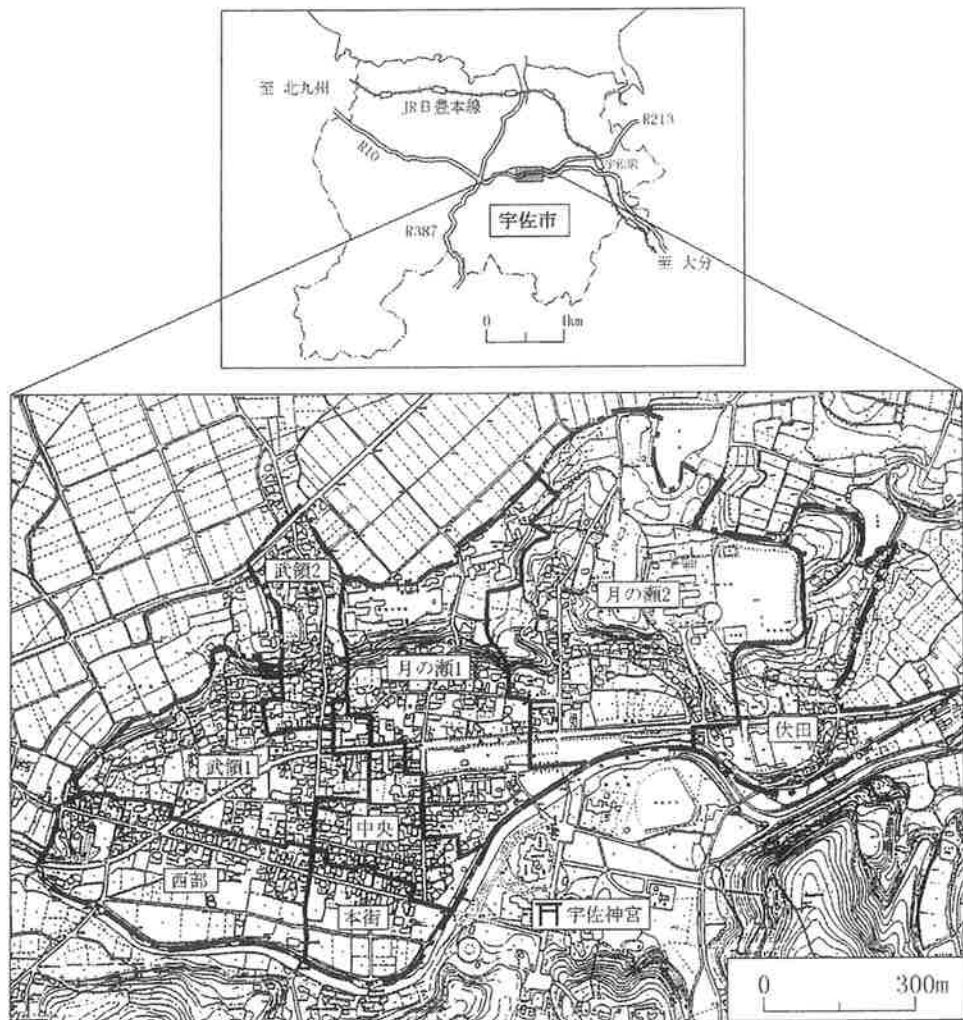


図1 研究対象地域の概要

(注) 宇佐市の資料により作成。

(2) 研究対象地域の概要

宇佐市は、1999年現在、人口49,585を有する大分県北部の拠点都市であるとともに、文化財の宝庫といわれるように、古い歴史を有する都市である。同市の市街地は、臨海部の柳ヶ浦・長洲地区、内陸部の四日市・駅館・宇佐地区の5地区で形成されており、分散型の市街地構造となっている。特に宇佐地区は、宇佐神宮を中心に宇佐観光の中核として位置づけられる。宇佐地区は宇佐市東部に位置しており、とりわけ宇佐神宮地区とよばれる範囲は、神宮北側に位置する93.1haの地区、即ち、行政区としては中央の全域と、伏田、月の瀬1・2、本街・西部・武領1・2の一部に該当する⁷⁾。これが、本稿でいう宇佐神宮門前町を統計分析できる最小の範囲であるゆえに、当該地区を本研究対象地域として設定することにする(図1)。

当該地区の人口は、1999年現在1,485であり、世帯数は526である。このうち、伏田・中央の2地区に比較的集中している。当該地区の人口および世帯数は、近年減少傾向にあり、特に西部地区においては、ここ15年で人口が約20%、世帯数が約10%減少している。また、1世帯あたりの人員は2.9であり、これは市の平均3.0を若干下回っている⁸⁾。

かつて、この地区は九州の大半を領土に持ち、その財政的・宗教的勢力は、国東半島の仏教文化を含めた宇佐文化の中心地区であった。現在、この周辺には、宇佐神宮をはじめとする数多くの文化財や古墳群が点在している。これらの文化遺産は、歴史的意義を有する重要な宝であると同時に、近年では、「歴史ミュージアムシティUSA」の名のもと、これらを観光資源として有機的に生かした観光振興が図られており、市の産業構造の一翼を担っている⁹⁾。

II. 宇佐神宮門前町の地域生態

「地域」の概念に関しては、従来から様々な議論が繰り広げられているが、わが国における地理学的研究の中では、山本他¹⁰⁾による「一定の領域で諸要素が結合し、作用し合って関連をもち、一要素に生じた変化は時間的にはずれはあっても、結局は他の要素に影響を与え、ついには全体が変化するようなまとまり」という概念があげられている。即ち、様々な地域構成要素を把握し、最終的には地域の全体像を描き出すことが地域研究の一般的な方法であり、目的である。そこで、ここでは宇佐神宮門前町というミクロな地域を対

⁷⁾ 宇佐市(1996):『宇佐地区整備計画』。宇佐市、52頁。

⁸⁾ 前掲7)、50~51頁。

⁹⁾ 1995年3月に、2005年を計画の目標年とした「宇佐市観光開発基本計画」が策定され、その中で「歴史ミュージアムシティUSA—神様も100ねん遊びたかったまち—」がテーマとして掲げられている。即ち、「歴史ミュージアムシティ」とは、「由緒ある歴史が広く存在するまち」を表現したものであり、「神様も100ねん遊びたかったまち」とは、神様がこの地に降りた後、一箇所に落ち着くまでに100年間放浪したという伝説によるものである。前掲7)、41頁。

¹⁰⁾ 山本正三・高橋伸夫・石井英也・手塚章(1983):首都圏外縁部における農村の地域生態—茨城県出島村の事例—。筑波大学地球科学系人文地理学研究Ⅶ、53頁。

象に、特に景観特性、土地利用、建物動態、商業活動の実態という側面を取り上げ、当該地区における地域生態について試論したい。

(1) 景観特性

まず当該地区の景観特性についてみると、最も基本的な景観構成要素である地形は、標高10m強の位置にあり、北側は標高約30mの台地、南側は標高30m以上の小高い山や丘となっており、盆地上の地形となっている。

地区を構成する道路は、東西方向に通る国道10号と宇佐神宮の西参道を基軸に、碁盤目状に近い道路網を構成している。地区内の道路幅員についてみると、古くから宇佐神宮の門前町として発達した市街地であるため、幅員の狭い道路が多くなっている。そのため国道10号以外の道路は全て幅員6m以下の道路という状況になっている。

さらに、地区には多くの水路が通っており、その一部は建物の密集する地域にもあり、景観構成上の重要な一要素をなしている。これらの水路の幅員は約1mあるものの、生活排水路としても利用されているため、水量が豊富で透明度が高くきれいな水が流れる区間と、生活排水によってやや濁った区間がある。とりわけ、宇佐神宮神橋付近の寄藻川に集約され排水される区間については、景観保全上好ましくない状態となっている¹¹⁾。

文化的景観構成要素としては、特に参道沿いに情緒ある生垣や土塀のある古い家屋が建ち並んでおり、歴史的町並み景観が形成されている。そして、これら古い和風建築の大半が屋根にしゃちほこを設置しており、町並み景観にアクセントを与えている。また、西参道と国道10号のほぼ中央を東西に通る道路には、交差点部に小さなほこらが点在している¹²⁾。このように、狭小な範囲ではあるが、伝統的門前町としての風格ある歴史的景観が残存しており、今後、これらの潜在的資源をクローズアップしながら整備し、歴史的観光空間の形成に資していくことが市当局で検討されている。

(2) 土地利用の現状および動態

当該地区における土地利用の概況をみると(図2)、水田・畑・樹林地の間を住宅地が広がっており、商業施設をはじめとする生活利便施設が国道～宇佐神宮前に分布している。近年、宇佐市の地区整備計画の中で用途地域が指定され、徐々に農地転用が進んでいるが、その主目的は宇佐神宮地区では住宅地化とされている。なお、宇佐神宮周辺地域における用途地域は、84.6ha(宇佐神宮地区面積の90.9%)が指定されている。内訳は、①第2種住居専用地域が当該地区の52.1%を占め、国道10号以北に指定、②住居地域が、28.8%を占め、主に国道10号以南の宇佐神宮地区東側・西側に指定、③近隣商業地域は10.6%を占め、国道10号沿いの宇佐神宮地区中央部および宇佐八幡駐車場以南に指定、の3用途地域である。また、宇佐神宮地区の9.1%にあたる8.5haが農業振興地域に指定されてお

¹¹⁾ 宇佐市(1991):『宇佐神宮周辺景観計画調査委員会報告書』。宇佐市、11頁。

¹²⁾ 前掲11)、11頁。

り、その全域が農用地区域である¹³⁾。

農地転用についてみると、1990年から1997年までの農地転用件数は、11件・8,978㎡が実施されている。行政区別では、西部、月ノ瀬において、その動向が顕著である。転用目的は、住宅地が9件・7,407㎡と最も多く、宇佐神宮地区の農地転用面積の83%を占めている¹⁴⁾。しかし、国道10号沿いには都市的未利用地が点在し、最近の宅地化はあまり進んでおらず、有効な都市機能を持たないまま現在に至っているというのが現状である¹⁵⁾。

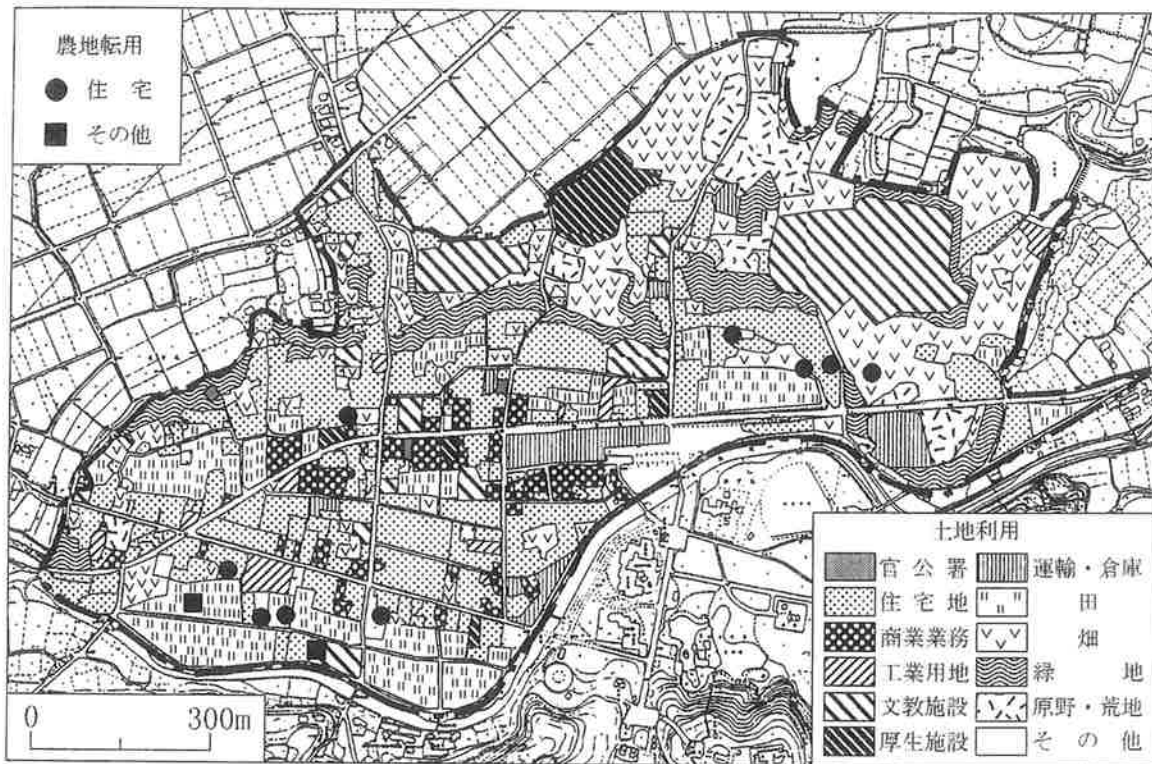


図2 宇佐神宮地区における土地利用形態および農地転用状況（1990～1997年）

（注）宇佐市の資料により作成。

¹³⁾ 前掲7)、65頁。

¹⁴⁾ 前掲7)、57頁。

¹⁵⁾ 宇佐市商工会・中小商業活性化事業推進委員会（1996）：『宇佐神宮周辺再開発基本計画策定事業報告書』。宇佐市、10頁。

(3) 建物の機能および動態

次に、建物の機能と動態についてみることにする。まず、宇佐地区を全体的にみると、日用買回り品程度の商店と農家住宅により市街地が形成されており、「宇佐歴史観光都市の玄関口」としての交通施設および各種観光施設が十分とはいえない状況にある。

現在、宇佐神宮地区内の建物の総数は581件である。このうち最も多いのは住宅の405件で、全体の約70%を占めている。次に多いのは店舗併用住宅で、73件であり13%である。その他、官公署施設や金融機関などが国道10号沿いの地区中央部に立地している¹⁶⁾。

宇佐神宮周辺における商業・観光施設の現況は、国道10号線沿いに神宮参拝客を対象とした観光型売店・宿泊施設、旧商工会跡地に若干の商業施設と国道10号線沿いに点在する最寄型の店舗がある程度で、商店街としての連続性はみられない。また、店舗併用住宅は、宇佐神宮前および、国道10号線、市道生代・西参道線沿いに点在している。学校や病院のような大きな文教厚生施設は、比較的標高の高い地区の北側に立地している。さらに、それを取り囲むように、一般住宅および農家住宅などにより市街地が形成されているが、現在、観光拠点としての計画的な市街地形成は進められていない。また、宇佐市商業統計に

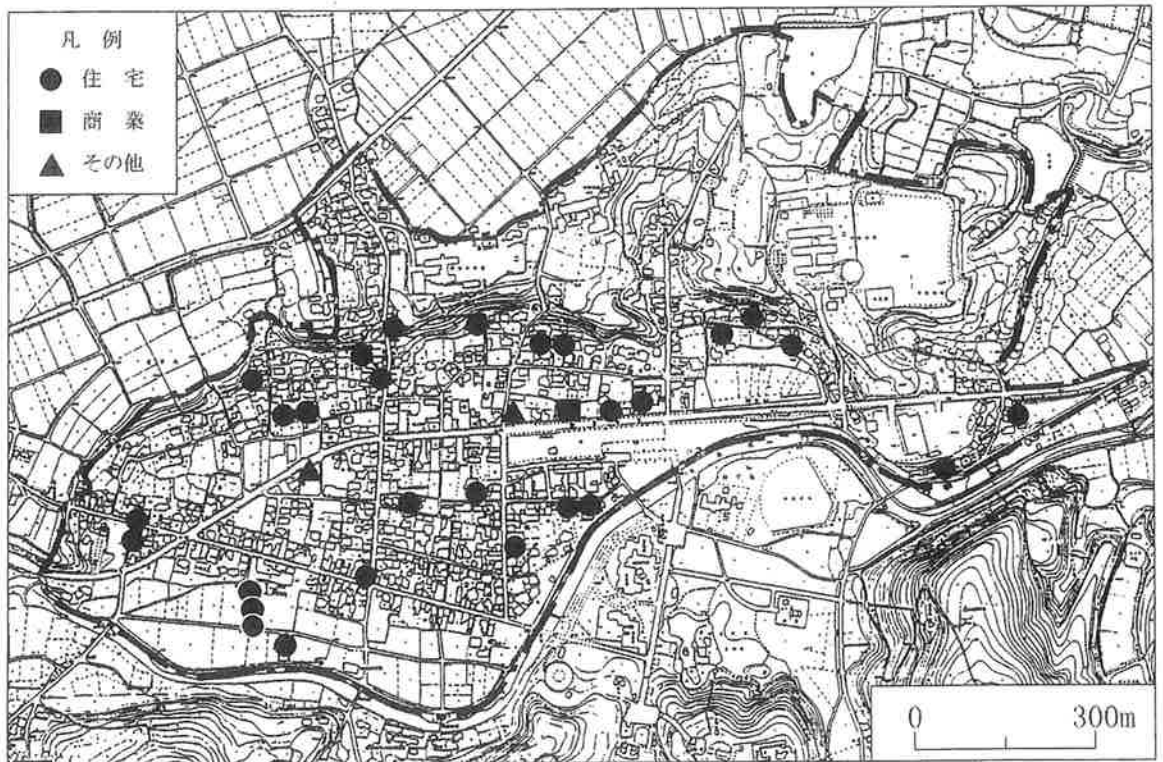


図3 宇佐神宮地区における建物の動態 (1990~1997年)

(注) 宇佐市の資料により作成。

¹⁶⁾ 前掲7)、62頁。

よると、宇佐神宮地区における商店数は、物販店が17店舗、飲食店が3店舗、サービス店が1店舗の計21店舗であり、観光客はもとより地元住民に対する食品や日用雑貨などの最寄品についてもほとんど対応できていないのが現状である。そのような中、宇佐市アーバンデザイン会議では、景観整備の実現化とともに、新しい商業・観光施設の開発を促進し、地域活性化を図っていくことが検討されている。

また、当該地区における建物動態をみると（図3）、1990年から1997年までの建物動態は30件である。そのうちの29件は住宅化である。国道10号以北の集落、宇佐神宮参道付近の近隣商業地、地区南西部の農業振興地域（農用地）での建設活動が特に顕著となっている¹⁷⁾。それに対して、近年、正確な件数は不明であるが店舗などの空家化も若干みられ、当該地区の経済的地盤沈下が懸念されつつある。

(4) 参道沿い商店街における商業活動の実態

最後に、宇佐神宮門前町の参道における各商店に対して、商業活動の現状や今後の展望に関するヒアリングを行ったので、ここに報告したい（表1）。なお、今回は宇佐神宮前参道沿いの観光型商店街に限定したので、サンプル数は18件と少ない。

まず、開業年は、10件もの店舗が約40年前と回答している。その頃から、この商店街は職住一致形態から職住分離あるいは職住近接のテナント型商店街に移行し始めたという。これらは全て土産品店および飲食店の複合経営であり、土産品としては全て宇佐名物「宇佐飴」を製造・販売しているほか、大分県の名産品や飾り物などを取り扱っている。また、これらのほとんどが前業種あるいは前世代の事業について不明であると答えているが、3件の店舗は先代から宇佐飴の製造・販売を専門とする老舗であったという。その他は江戸時代創業の老舗が1件、1970年代2件、1980年代4件、1990年代以降1件であるが、ほとんどの店舗が職住分離で基本的にはテナント型商店街であり、職住一致はわずか3件しかないため、先代以前のことは不明な点が多い。このように、ほとんどの店舗は職住分離であるゆえに、ほとんど生活空間としての機能をなしてはいないが、一応、従業員はほとんど近隣および宇佐市内の住民である。また、出身地もやはり宇佐市内が多く、1件のみ福岡県、あとは大分市・別府市・中津市など県内出身者であった。

当該地区における店舗のデイリーリズムは、おおよそ9時開店、17時閉店が多いが、店舗によっては早朝7時に開けるところもあれば、夜は21時くらいまで閉めないところもあり、特に地区的な規定はない。また、季節によって全く時間帯は変化し、例えば、夏の6・7月あたりは往々にして早く開き、遅く閉めるところが多く、12月・1月後半・2月あたりはその逆であるという。しかし、基本的には全くデイリーリズムの規定はなく、個々の都合による自由奔放な営業スタイルである。またいずれの店舗にも、定休日などは特に設けられていない。中には冬のオフシーズン数週間も閉店しているところもある程である。

¹⁷⁾ 前掲7)、62頁。

表1 宇佐神宮門前町参道沿い商店街における店舗の実態 (2001年)

	①開業年	②事業内容	③経営者住所	④職住状況	⑤後継者	景観保全に関する意識
1	■	◎+●	宇佐市	▲	×	反対…規制やコスト面
2	■	◎+●	宇佐市	▽	×	反対…規制やコスト面
3	※	○	宇佐市	▽	★	反対…観光化による地域変化
4	■	◎	宇佐市	▽	☆	反対…規制やコスト面
5	■	◎	宇佐市	▽	×	反対…高齢であること
6	□	◎	宇佐市	▽	×	反対…規制やコスト面
7	□	◎	宇佐市	▽	×	反対…無意味
8	■	◎	宇佐市	▽	×	反対…規制やコスト面
9	■	◎	宇佐市	▽	×	反対…規制やコスト面
10	□	◎	宇佐市	▽	★	反対…規制やコスト面
11	◆	◎	別府市	▽	☆	賛成…歴史文化の復元
12	※	◎	宇佐市	▲	×	反対…規制やコスト面
13	■	◎	宇佐市	▽	☆	反対…観光化による地域変化
14	□	◎	宇佐市	▽	×	反対…規制やコスト面
15	■	◎	中津市	▽	☆	反対…規制やコスト面
16	◇	◎	福岡県	▽	×	賛成…観光化による活性化
17	■	●	宇佐市	▽	×	反対…規制やコスト面
18	■	◎	宇佐市	▲	☆	反対…規制やコスト面

①：※1959年以前 ■1960年代 ◆1970年代 □1980年代 ◇1990年代以降

②：◎土産品 ●飲食 ○宿泊

④：▲職住一致 ▽職住分離

⑤：★継承可能 ☆継承未定 ×継承不能

(注) ヒアリング調査により作成。

また、地区全体的にいえることであるが、店主および従業員の高齢化が比較的進んでおり、その反面、若年層、即ち後継者にあたる世代の事業継承が困難な状況にあることがうかがえる。ほとんどは結婚を機に大分市内や福岡県などに居を構え、サラリーマン生活を送っているという。しかし、当該地区におけるこうした店舗の利用客は年々減少し、少ないところでは一日に一桁しか立ち寄りないと落胆していたところもあるほどであり、事業を継承する意欲がないところが多かった。ほとんどが現世代で店を閉めることを考えており、今後、テナントの利用の仕方いかんによって様々な地域の変容が考えられる。

では、町並み景観保全に対する意識と今後の展望について聞いてみると、そもそも1990年代にはいり、市当局、特に都市計画課などによって宇佐神宮周辺地区における景観整備事業が立案され、一時期さかんに議論されたことがあったが、当時体系化された基本的枠組みおよび具体案は、結局実現せずに現在に至っている。具体的には、1990年に国道10号およびその周辺地域と一体となった歴史的景観を有する地区に関する整備計画の策定を目的として、旧建設省、大分県、宇佐市および地域代表者から構成される「宇佐神宮周辺景観計画調査委員会」が設立している。ここでは、地区現況の整理、住民・来街者意向調査が実施され、その結果から問題点および整備課題の整理、地区整備方針、地区整備構想、整備手法の検討が決定された。また、1995年、宇佐市商工会において「宇佐市小規模事業振興基本計画」が策定された。ここでは、宇佐市内における商業活性化のための基本的な方向付けを行う中でのテーマである「宇佐神宮周辺の再開発プロジェクト」を推進するために、「宇佐神宮周辺再開発基本計画策定事業」が実施され、商業施設をはじめ観光、歴史、文化施設を新たに導入し、まちづくりの視点から新たな観光資源を創出し、大分県北部の

観光拠点として、また宇佐市観光の中心地と位置づけ、さらに、自然を生かした河川の整備や景観を配慮した住環境づくりなども併せて計画された¹⁸⁾。

これについて、当時も今も参道景観整備に熱心な住民もいるが、今回の調査でも明らかになったように、当時からほとんどの店舗において整備事業反対を訴えていた。その理由としては、「道路拡張による店舗の立ち引き、移動、修景などにより多大なコストがかかること」という理由でおおよそ一致している。また、個々に、「高齢なので、大規模な修景事業に参加できる気力も体力もない」、「地区衰退が著しく、整備したからといってこの地区に対する夢や希望を見出せない」など、地域の衰退とともに地域活力の低下をあらわにしていた。

このように、現状では全く将来展望を見出すことができず、近年の行政施策も空回り状態で現在に至っている。そのような中、最近組織化されたアーバンデザイン会議は、地域景観の保全、地域社会の再生の切り札として、重要な立場に位置づけられ、今後、地域住民の意識をより専門的に把握しつつ、合意形成を図っていき、宇佐神宮門前町活性化の実現を誘導していくことが求められよう。

Ⅲ. 宇佐神宮門前町の観光動態

(1) 宇佐市における観光動態

宇佐神宮は古代より、宇佐文化の中心地として栄え、周辺地域は古代文化発祥の地を伝える数多くの歴史的観光資源に恵まれている。特に宇佐神宮地区には、文化財が30件周知されている(表2・図4)。年代は古墳時代から明治時代まで幅広く、種類も古墳・墓地・屋敷跡・街道・仏像など多岐にわたっている。特に、国指定史跡宇佐神宮境内にある宇佐神宮本殿が国宝に指定されているほか、大楽寺・大善寺に安置されている有形文化財が国指定重要文化財の指定を受けている。また、市内を概観しても、大分県立博物館、西本願寺別院および東本願寺別院、鷹栖観音、芝原善光寺、双葉山生誕の地など、歴史性かつ地域性豊かな観光資源が分布している。

しかし、これらの観光資源の活用は十分とは言えず、この地を訪れる観光客は年間約250万人を数えるが、宿泊施設や魅力的な名産品、飲食サービスなどの施設整備が遅れているため、観光産業への経済的波及効果が薄く、市内での滞留が極めて少ない。また、観光客を対象にした商業・観光施設も少なく、入り込み観光客は宇佐神宮の参拝のみに終わっているのが現状である(図5)。従って、全体的に観光空間としての雰囲気や賑わいに欠けている。

¹⁸⁾ 具体的には、寄藻川河畔の整備、鳥居や灯籠など、新たなモニュメントづくり、地域内の道路の拡幅と歩道の整備、駐車場の整備、西参道、魚町、新町、本町、横町などの側溝や町並み景観の整備があげられているが、未だほとんど実現していないのが現状である。

表2 宇佐神宮地区における文化財（1999年）

番号	名称	種別
1	庚申塔	市指定有形文化財。1593（文禄2）年の銘文等あり。
2	尻掛窯跡	奈良時代。旧弥勒寺使用の瓦窯跡。
3	両塚古墳	古墳時代。
4	円通寺	神子栄尊が開いた古刹。市指定有形文化財の木造阿弥陀如来立像等。
5	旧御臨行道	
6	大楽寺	後醍醐天皇の勅願寺。到津大宮司家の菩薩寺。到津大宮司家墓地。国指定重要文化財の木造弥勒仏及両脇侍像・木造四天王立像等。
7	旧中道小路	
8	旧宇佐宮番長殿兼下宮社司職の永弘家	
9	護国寺跡	南北朝時代に創建。
10	宮成大宮司家墓地	
11	26号機関車	市指定有形民俗文化財。明治24年製造、ドイツ製。昭和23年～40年まで宇佐参宮線で使用。
12	旧宇佐宮大々工職兼小山田宮社司職の 小山田家屋敷と旧宇佐宮祝職の祝家屋敷跡	
13	極楽寺	市指定有形文化財の木造弥勒如来坐像。旧弥勒善寺講堂の本尊。室町時代。
14	宮成大宮司家の館跡	
15	戒光院跡	
16	旧葎小路	
17	瑞泉寺	応永14年に創建。
18	永福寺・益永の居城跡	応永年中の創建。宇佐宮政所惣検校益永家の菩薩寺。16世紀後期。
19	光隆寺跡	南北朝時代に創建。創建。宮成家の創立。
20	藤田遺跡	平安～鎌倉時代にかけての屋敷跡。
21	勅使街道	宇佐大路といい、勅使が宇佐宮参向する際に利用。
22	西山観音堂	木造聖観音菩薩坐像。
23	百体社	隼人の霊をまつる。
24	凶首塚古墳	県指定史跡。横穴式石室が露出。隼人の首を埋めたと伝えられる。
25	化粧井戸	市指定史跡。放生会の際、傀儡子人形を洗い清める。
26	大善寺	国指定重要文化財の木造薬師如来坐像。旧弥勒寺金堂の本尊。
27	国指定史跡宇佐神宮境内	宇佐神宮境内地と宮迫地区。
28	辻平遺跡	弥生時代の住居跡と中世の墓地など。
29	宮成氏の居城跡	16世紀後期。
30	北田遺跡	中世の屋敷跡。

(注1) 宇佐市の資料により作成。
(注2) 番号は図4に対応。

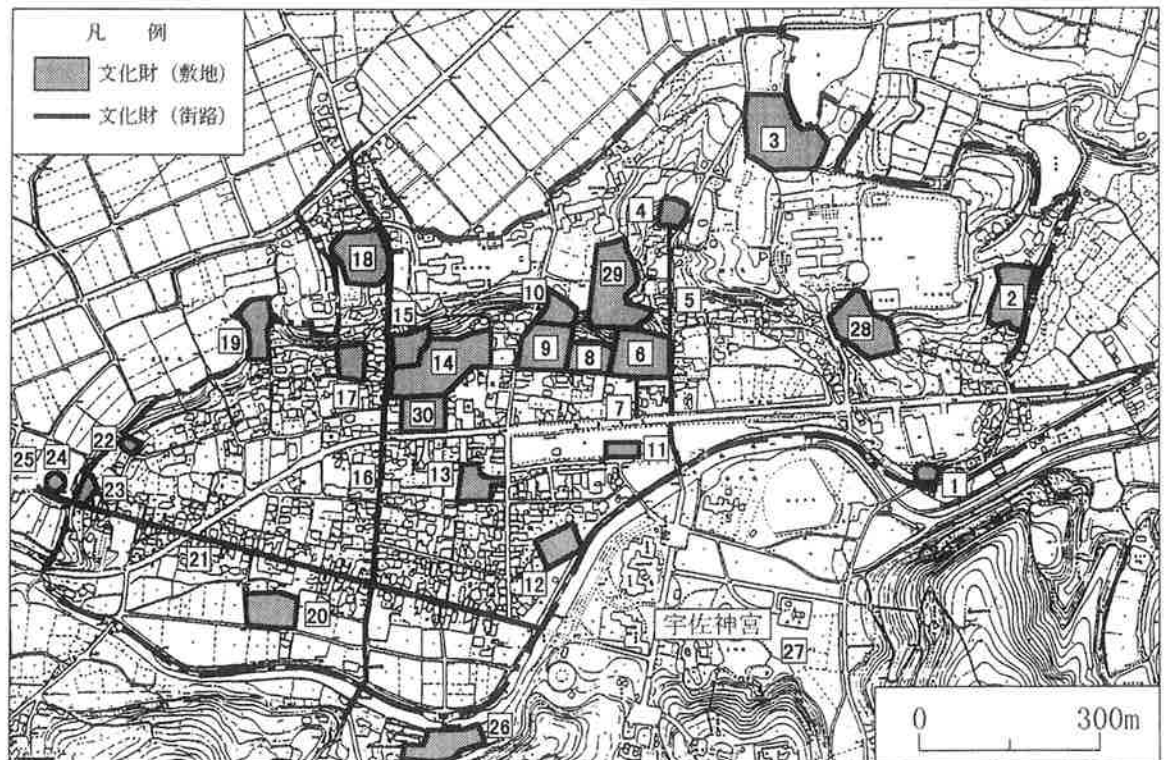


図4 宇佐神宮地区における文化財の分布（1999年）

(注) 宇佐市の資料により作成。

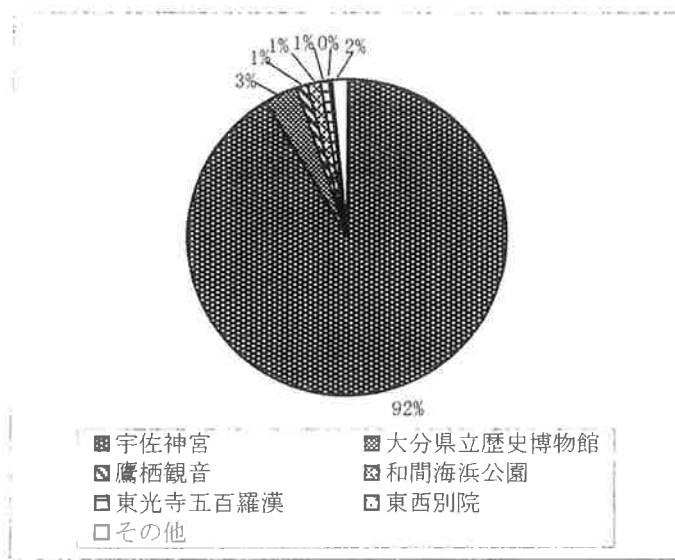


図5 宇佐市における観光資源別観光客数の割合 (1999年)

(注) 宇佐市の資料により作成。

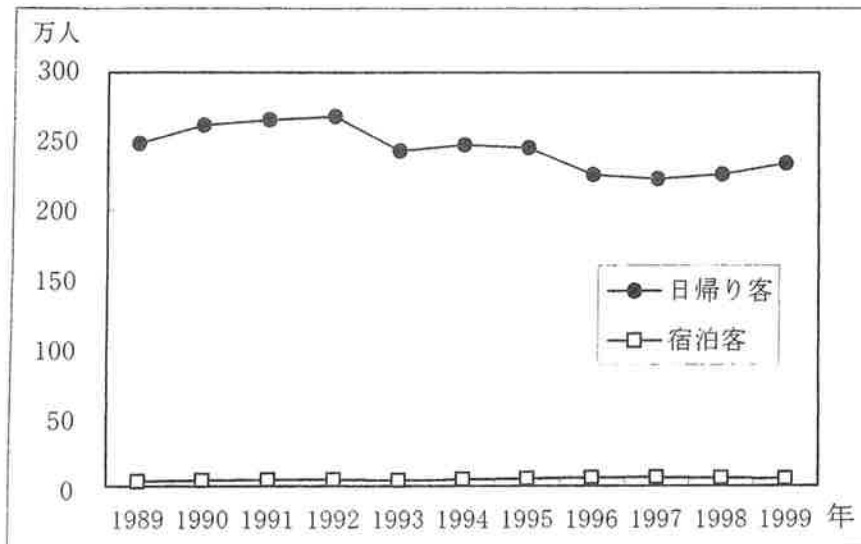


図6 宇佐市における観光客数の推移 (1990~1999年)

(注) 宇佐市の資料により作成。

ここで、宇佐市の観光客数の推移をみることにする (図6)。これによると、近年、観光客数は停滞傾向を示しており、併せて観光客全ての消費額や宿泊費もさほど大きな変化がみられない。しかし、観光客一人当たりの消費額は、1997年で1,523円と低水準となっており大きな課題である。これについて周辺主要都市と比較すると、日田市5,042円、佐伯

市 3,683 円、中津市 1,768 円といずれも下回り、大分県内で最も低い水準にある¹⁹⁾。観光客が多くても、消費額が少なければその経済的波及効果は薄いゆえに、今後性急に宿泊・日帰り客双方に対する、各種観光サービスの質的向上を図る必要がある。

続いて、観光季節性（月別観光客数の推移）をみると（図7）、やはり、年間を通じて宇佐神宮参拝が市内観光形態の大部分を占めているだけに、初詣の1月が卓越しているが、それ以外の時期が往々にして停滞してしまっている。しかし、市内に潜在している豊富な観光資源を有機的に結合させ、歴史ミュージアムシティの名の如く周遊観光ルートでも構築したりすれば、単に社寺参詣型観光地としての機能のみならず、歴史文化観光地として、教育活動や文化体験活動などの格好のフィールドとなり、ある程度通年型に近い観光季節性が実現しうるのではなかろうか。少なくとも、夏休みなどに新たなもう一方のオンシーズンを創出することは可能であろう。

また、宇佐市における入込観光客の観光市場性（出発地別観光客数）の構成と推移をみると（図8）、大分県内よりも隣接した福岡県からの観光客が多く、卓越している。また、大分・福岡両県以外の九州からも多く、さらに中国、四国、関東、近畿、中部の各地方からも多くの観光客が訪れている。なお、本州からは修学旅行の周遊拠点としての機能が介在しており、シーズンになると各地方から高校生の団体がみられる。しかし、日帰り・宿泊別にみると、遠隔地にもかかわらず概して宿泊客数の割合が少ない。これは、結局、宇佐の広域観光圏内にある別府温泉郷や由布院温泉などといった一大観光拠点に宿泊機能を

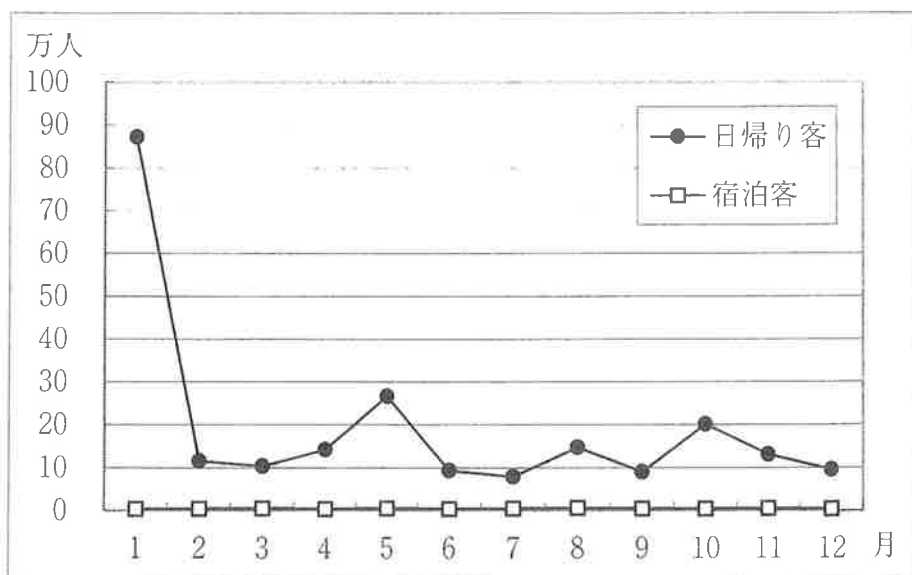


図7 宇佐市における観光季節性 (1999年)

(注) 宇佐市の資料により作成。

¹⁹⁾ 前掲15)、9頁。

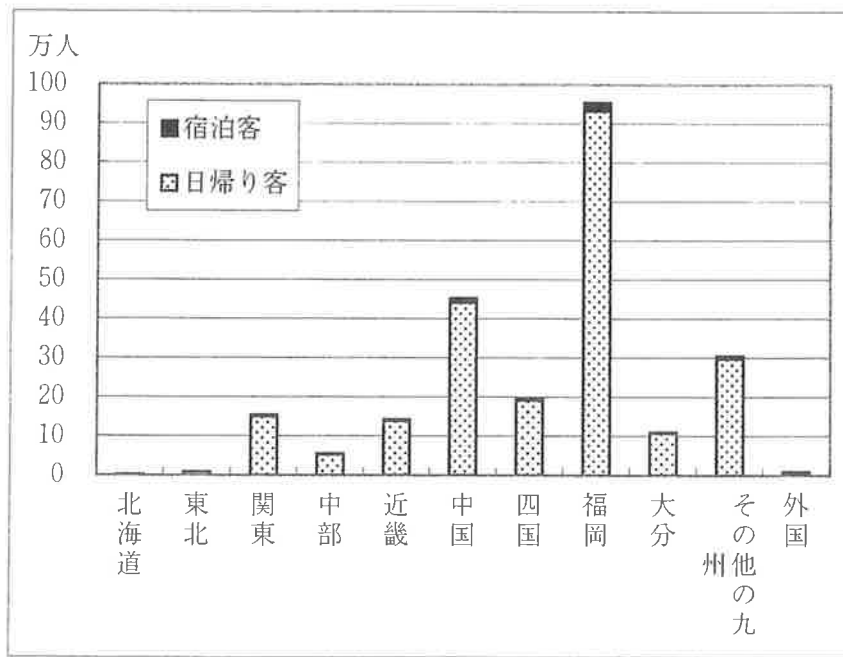


図8 宇佐市における観光市場性 (1999年)

(注) 宇佐市の資料により作成。

表3 宇佐市における祭・イベントの参加者数 (1999年)

イベント名	イベントの期間	単位：人		
		宇佐市民	その他	計
宇佐市みなとまつり	7月中旬	27,000	6,000	33,000
宇佐神宮夏越大祭	7/31~8/2	34,000	4,000	38,000
宇佐市七夕まつり	7月下旬~8月上旬	39,000	6,000	45,000
宇佐市ふるさとまつり	11/13~11/14	44,000	6,000	50,000

(注) 宇佐市の資料により作成。

置き、宇佐自体は広域観光ルート上における通過型観光拠点の一つに過ぎないからである。

その他、様々な観光イベントが催されているが、主要4大祭りを見ると、地元以外の参加客が少ない(表3)。このように、現在は地元集客型の観光イベントにとどまっているが、今後は先述したような観光季節性の通年化とともに、こうしたイベント活動を含めた観光市場性の広域化、観光客の市内滞留の促進を図っていくことが求められよう。

(2) 宇佐神宮門前町における観光客の実態

先述したように、宇佐市の観光客数を観光拠点別にみると、宇佐市の入り込み観光客数の約90%は宇佐神宮への観光客であるゆえに、宇佐市における観光客の動態を把握する際、宇佐神宮門前町周辺における動向を把握することは重要である。そこで、宇佐神宮門前町参道における観光客に対して若干の観光動態調査を行ったので、ここに報告したい。なお、調査を実施したのは2000年10月であり、観光客自体非常に少なかったが、とりあえず50のサンプルを得ることができた。

宇佐神宮における観光客は、全体的に高齢者が多く、若い人が少なかった。若い人に印

象を聞くと、若い人向けの観光施設がないので、観光地としての魅力に欠けるという意見が多い。特に、郷土料理や名産品に接する機会、土産品などが少ないという意見が多く、これらも観光客を引き付ける魅力に欠ける要素であろう。今後は地域を象徴するような個性的な料理・土産品の開発が必要であろう。

さらに、門前町景観もあまり良い印象がないという意見が多い。また、駐車場・道路の整備が十分になされておらず、特に、宇佐神宮前駐車場は有料でなおかつ高いという意見が非常に多く、極めて評判が悪かった。例えばちょっと参道沿いのお土産屋に立ち寄りたいたい観光客にとっては、現在の駐車場では高すぎ、気軽に立ち寄ることができないという意見が多い。オープンスペースを利用し、市営の無料駐車場を設置することによって、宇佐神宮のみならず、門前町参道の観光関連施設にも気軽に立ち寄れるような観光空間整備につながり、商店街も潤うのではなかろうか。

観光客の行動パターンは、宇佐神宮観光客のほとんどが、神宮参拝のみを目的としてすぐに帰るパターンである。極少数であるが、国東半島および別府温泉郷など他の観光拠点を周遊する際に立ち寄り拠点として宇佐神宮を見学し、市内は素通りというパターンもみられる。宇佐市には、既述したように潜在的に観光資源性が高いにもかかわらず、ほとんど機能していない。宇佐神宮を拠点として市内観光ポイントとの連携を深めれば、宇佐が目指す歴史ミュージアムシティが実現しうるであろう。そのためにも、周辺に案内板や観光マップのような観光客向けの情報・宣伝を設置し、地域をわかりやすく理解できるような配慮があれば、それが市内隣接観光拠点への誘導効果を引き起こせるのではなかろうか。例えば、観光ガイドブックの中には、宇佐市が国東半島の一部であるような記述がなされているものもある。さらに、宇佐神宮や県立風土記の丘など、ごく限られた観光拠点について紹介されていることが多い。今後、正確な観光宣伝活動の推進が必要であり、個々の観光拠点の紹介のみならず、宣伝活動からの広域観光ルートの構築が必要である。

また、宇佐神宮参拝客が年間入込み客数の大半を占めていることからわかるように、季節性は1月に傾注しすぎているので、今後は四季を通じた観光地づくり、季節による魅力を生かした観光地づくりを進めていく必要がある。さらに、観光関係者や観光施設の従業員などが、観光地としての側面の認識を高め、観光客を快く迎え入れる観光地づくりを意識していくことが最も大切なことである。その際の組織・体制づくりをまずは検討すべきであろう。

まちづくりの観点から構築された観光開発は、特に歴史的町並み保存やエコ・ミュージアムなど、集落規模での観光振興策において近年盛んに行われるようになったが、往々にして行政・観光協会・商工会・民間関連業者・地域住民など、官民が一体となった取り組みが必要である。宇佐神宮門前町は、まさに、こうしたまちづくりの観点から様々な意識の合意形成を図り、観光地化を進めていくべきであると考えられる。

V. むすび

本稿では、宇佐神宮門前町を対象として、現状の地域生態と観光動態について明らかにした上で、今後の景観整備や観光振興の方途について試論することを目的とした。

地域の就業構造や所得構成、文化や景観などにおいて「門前」であることの影響がある程度以上顕著な現象として表出するならば、それが門前町であり、さらに観光地化が進めば、観光客および参拝客、各種観光施設経営のための資材・若干の労働力や生活資源などを受け入れ、門前町としての観光所得を生み出す複合体ということになる。現代社会では、宇佐神宮門前町を含め、社会集団のいかなる機能も地区レベルで完結することはほとんど皆無であるが、従来は閉鎖的な社会システムであるのが一般的であった。しかし、地域社会が、歴史的にそれぞれの機能の合理化を図るために開発してきた産業形態や社会組織、土地利用や景観といった地域の基本的構造は、地域を取り巻く様々な社会経済的変化にも関わらず残存しやすいという特徴がある。そしてその基本的構造は、その地域が何らかのインパクトの受容により変貌する際には、フィードバックして新しい開発を規制したり、さらなる発展の条件となりうるのである。これについて、石井²⁰¹は、「地域変貌の契機は、イノベーションの受容によって与えられる。それは、交通の変化、経済市場や需要の変化、あるいは政策の変化などと結びついて発生する。イノベーションは、一般にそれによって生活を向上させることができると考えられる、より生産性の高い商業的要素の導入であることが多い。」と述べている。そして、そのイノベーションは、何よりも地域住民の評価を経て受容され、一度受容されるとその地域における様々な社会経済文化的サブシステムにインパクトを与える。そして地域社会や構造が発展的に変化し始めるのである。

宇佐神宮門前町が、今後観光地として理想的な土地利用・観光景観を完成させるために、現在、行政が中心となり「アーバンデザイン会議」という形で再び動き始めようとしている。もはや、単なる社寺仏閣に頼る観光には限界があり、新しい発想での観光空間の創出が必要であるが、その際のイノベーションの開発・導入は、参道沿い商店街の人々や周辺地域の住民、観光（参拝）客の受容を経ることが前提となってくる。従来、検討されてきた様々な計画・施策がことごとくフェイドアウトしていった要因は、結局地区住民のイノベーション受容の拒否に他ならないが、今後、これらを教訓として継続的に住民や観光客の動態・意識を把握していき、長期的に門前町観光地としての再生・発達を図っていくことが期待される。

【付記】

本稿の作成にあたって、宇佐市商工観光課の秋吉康弘氏および都市計画課の西時行氏には、御多忙の中、貴重な御指摘・御教示を賜りました。ここに、深甚なる感謝の意を表します。

²⁰¹ 石井英也（1986）：日本における民宿地域の形成とその地理学的意味—地域生態論の一つの試み—。筑波大学地球科学系人文地理学研究 X、43～60 頁。